

授業アンケート結果 報告書

平成 26 年度(2014 年度)まとめ

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

総括

昨年度集計した平成 23－25 年度の 3 年間の授業アンケート結果の公開に続き、今年度から毎年、前年度の授業アンケート結果を集計した報告書を大学のホームページに掲載して、情報公開に取り組むことになった。授業アンケート結果は、過去 3 年間と同様に、平成 26 年度においても、「学生の授業への取り組み」はまだ不十分な点が見受けられるが、「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されており、本学では全学的に「意義にある授業」が行われている。

1. はじめに

本学では、各教員の授業形態・質の向上や授業内容の充実を目指して毎年、前期・後期に 1 回ずつ常勤・非常勤を含めて全ての教員の各担当科目で受講学生を対象として無記名で授業アンケート（図 I）を実施している。授業アンケートは、過去 3 年間とは異なり平成 26 年度から「学生自身の授業の取り組み」に関する質問が 2 問増えて 5 問、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する質問を 7 問、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する質問を 2 問、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する質問が 1 問と、全部で 15 問の質問を行った。さらに、アンケート用紙には、学生の意見を直接記入できる欄があり、各教員の授業に対する学生の「生の声」を反映させることができるようになっている。今回集計した平成 26 年度(2014 年度)に関しては、過去 3 年間とは異なり、実習を含むすべての授業・演習・実習でアンケート調査を行った。アンケートに授業内容を適切に反映させた回答を受講者に促すために、期末試験前の 15 回目（薬学科では 12 回目）までに授業担当者の判断で授業時間内にアンケートの回答を学生に行ってもらった。

授業アンケートの結果は集計され、授業科目ごとに各質問項目に対する 4 段階評価の度数分布図表やレーダーチャートを記載して各授業担当教員に返却している。4 段階評価点数が 8、3、2、0 点であるため、各授業科目に対する評価が厳格に表示されることになり、また、FDの一環として、学科内ですべての教員の担当科目の集計結果を閲覧することができるため、教員相互の講義参観などにより、各教員の授業の改善や向上に役立てることができた。平成 17 年度(2005 年度)以降、授業アンケートを実施して、このような授業アンケート結果に対するフィードバックへの取り組みを全学的に実施したが、平成 23 年度からの授業アンケート結果集計を公開して蓄積することにより、「学生一人ひとりの持つ能力を最大限に伸ばし、社会に有為な人材を養成する」本学の教育理念に相応しい教育が継続的に行われているか否かを評価できる有益な資料となると考えられた。

2. 授業アンケートの実施方法

アンケート内容と実施の変遷について：

本学では、平成 17 年度(2005 年度)より授業アンケートを実施している。授業アンケートの質問項目は適宜見直され、特に平成 22 年度(2010 年度)から教員が授業を改善できるよう質問項目の見直しを行い現在に至っている。また、授業アンケート結果を年度間で比較し教員の授業改善に役立てるために、授業アンケートの質問項目は、同じ項目を使用しているが、平成 26 年から設問項目を 2 項目増やして実施している。各年度とも前後期に各 1 回、年 2 回アンケートを実施している。

アンケート対象学生数と教科について：

平成 26 年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成 26 年	前期	308	107	28	135	13896	16081
	後期	492	103	31	134	14434	16970

アンケート集計・解析方法とそのフィードバック方法について：

その集計ののち、各質問項目に対する度数分布表（4 段階評価点数が 8、3、2、0 点）を作成した。大学全体、学部、学科、各科目単位で、質問項目を計算し、一覧(平均値一覧表)にまとめた。授業アンケート集計表（度数分布表・評価レーダーチャート）所属学科科目をまとめて学部長へ配付し、その後学科長より各学科において、面談等のフィードバックをしながら各教員に授業アンケート結果を返却するようにした。平成 22 年度(2010 年度)以降、授業アンケート結果を適切に授業改善につなげられるよう授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施した。そのため授業担当者に対する学科長の面談などのフィードバックが行えるように配慮し、平成 22 年度実施分より授業アンケート結果を学科長に渡し各授業担当者に返却するようにした。具体的な内容や方法は課題として残されている。学科毎に専門が異なり授業方法なども多種多様なため、各学科において適切な方法でフィードバックに取り組んでいる。今後全学統一したフィードバックの方法を検討していく。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について以下に全学的結果あるいは各学科結果について個々に記載する。平成 26 年度アンケート結果は、過去 3 年間の結果と比較して、学科間の相違や各学科での前期と後期の相違に着目してまとめた。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

過去 3 年間のアンケート結果と比較して、平成 26 年度においても「教員の授業に対する取り組み」や「学生の理解度・達成感」は概ね達成されているが、「学生の授業への取り組み」では、学科間で程度の違いはあるものの、学生の授業における予習・復習時間やシラバスに対する準備学習が不十分であると考えられる。総合評価としては、本学では全学的に「意義ある授業」が行われていると考えられる。

「学生自身の授業の取り組み」

平成 26 年度の前期・後期に関わらず、各学科での授業で 4 回以上欠席する学生は約 10%以下であるが、前期・後期ともにスポーツ健康福祉学科、臨床福祉学科、子ども保育福祉学科は他学部比べて 1-5 回欠席する学生の割合が多かった (Q1)。また、1 時間以上の予習、復習を行っている学生は、どの学科でも約 10%前後に留まっていたが、特に、子ども保育福祉学科は他学科より低く、一方、臨床工学科の後期では他学科より際立って高かった。(Q2、3)。シラバスに対する準備学習についても、全学的に十分行われていると言い難い状況であった。しかし、臨床工学科と言語聴覚療法学科では他学科より比較的準備ができていて学生の割合が高い状況であった (Q4)。学生の授業に対する意欲は、前期・後期に関わらず、視機能療法学科では比較的他学部より低いと感じられた (Q5)。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った目標や習得すべき事項の説明 (Q6、7)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力 (Q8、9、10)、また、わかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか (Q11、12) については、前期・後期に関わらず、約 90%以上の学生が教員の努力を感じている。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度や学習意欲の高まり (Q13、14) に関しては、アンケートを開始した平成 23 年度以降、徐々に改善が見られるようであるが、視機能療法学科では他学科より学生の理解度や意欲が低いようである。しかし、全体として学生の約 90%以上が授業を理解して、意欲があったと回答している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

平成 23 年度 (2011 年度) 以降、前期・後期に関わらず、徐々に授業に意義があまりなかったとする学生数が減少している。しかし、視機能療法学科やスポーツ健康福祉学科では授業に意義があったとする学生数が他学科より若干低下していた。(Q15)。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は学年が上がるに従って欠席回数が多くなる傾向が見られる。また1年次の欠席0回の学生が2年次以降、20%～30%欠席回数が多くなる傾向がある。このことから学生によっては学生生活に慣れるに従って、欠席回数をコントロールし授業を休んでいるという可能性が考えられる。【予習復習時間】では、どの学年においても「ほとんど予習をしていなかった」と言う学生が半数おり、1時間以上と答えた学生は前期・後期を通して、約20%未満である。このことから予習復習の習慣がほとんどない学生や必要性を感じていない学生がいる可能性があると考えられる。4年生になって国家試験や卒業履修の関係で、やっと予習復習の必要性を感じた学生が若干認められる。【授業中の取り組み】では、50%以上の学生は意欲的に授業に取り組もうとしているが、学年が上がるに従い意欲が低下傾向にある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業への取り組みに関する項目については、前年度と比較すると全体的に学生からの評価は低下している。特に授業への参加の促しについては、4年次の前期において約半数が積極的に取り組むような促しがされていないことが分かる。今後は、3年次・4年次になっても教員が積極的に授業の雰囲気作りや学生の学ぶ環境づくりのために努力する必要があると考える。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度については、全学年のなかでも前期1年生が「あてはまる」と回答した学生が少ない。このことから入学当初より学生に対してわかりやすい説明や指導が必要であると考えられる。【Q11 授業の目標や習得すべき事項の理解】と【Q12 学習意欲の高まり】の回答結果は非常に似た結果であったが、理解度や意欲を前期・後期で比較すると前期が低下傾向にある。そのため前期から授業での習得すべき事項をきちんと教育し、後期の授業に繋げる必要があると考える。また前期で理解ができず授業を受けている学生は学習意欲が高まらないまま後期を迎えることも予測される。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。今後は、将来の資格取得についても視野に入れながら学生の学習意欲を向上させ国家試験の合格に繋げていくことを学科が一丸となって取り組む必要があると考える。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果（図Ⅳ）

「学生自身の授業の取り組み」

学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は学年が上がるに従って欠席回数が多くなる傾向が見られる。以前の調査では1年生の欠席0回学生を年度毎の前後期で比較すると、どの年度においても欠席0回者は前期に比べ後期が減る傾向があった。ただ平成26年度では1～3年生の欠席0回者が前期より後期が増えている。しかし一方で4～5回の欠席者が増え、やはり一部の学生では学生生活に慣れるに従って、欠席回数をコントロールし授業を休んでいるという可能性が否めない。【予習復習時間】では年度や学年によってバラつきが大きい。しかし各年度の学年ごとに前後期の比較をすると予習復習時間は変わらない結果であった。また平成23年度（2011年度）1年生は平成25年度（2013年度）3年生であり、縦断的に比較した場合も予習復習の時間の変化はないことから、学年が上がるにつれ専門的な内容になり自己学習を積極的にするというよりは、予習復習の習慣がある学生や必要性を感じている学生は予習復習を行っているが、そうでない学生は行わないまま学年が進行している可能性があると考えられる。平成26年度では、前期では1～3年生では半数以上の学生が予習復習をほとんどしなかったとしているが、4年生の前期では80%以上の学生が予習復習を行っている。ただし後期では再び大部分がしていないと回答をしていることから、科目によって予習復習の必要性を感じていない可能性が考えられる。【授業中の取り組み】では、80%以上の学生は意欲的に授業に取り組もうとしているが、各年度とも「あてはまらない」と回答した学生は0にはならない結果であった。平成26年度も同様の結果で大部分の学生は意欲的に取り組んだと回答し、学年が上がるにつれ当てはまないと答えた数が減っている結果であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業への取り組みに関する項目について全項目とも80%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」に該当している。【Q5 授業の目標や習得すべき事項を説明した】と【Q9 わかりやすい説明や指導をしたか】の「あてはまる」「ややあてはまる」項目が非常に良く似た結果を示し、本授業で習得すべき項目を具体的に提示することが学生にとってはわかりやすい授業であると考えられる。一方で、【Q8 学生に授業への参加をうながす（質問等）】の「あてはまらない」がある場合では、【Q7 私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保つ】や【Q5 授業の目標や習得すべき事項を説明した】、【Q6 授業の開始時間を守っていた】などの項目で「あてはまらない」がある傾向が見られる。このようなことから、教員が積極的な授業の雰囲気作りや取り組みが学生の学ぶ環境づくりのためには必要であると考えられる。学生の年次変化で見ると、回答状況は学年進行によって回答傾向はあまり変化していないようにみうけられた。平成26年度でも、以前と同様に80%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しているが、特徴的なこととしてはどの質問とも前期より後期のほうが「あてはまる」「ややあてはまる」率が高くなっている。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度については80%以上の学生は「あてはまる」「ややあてはまる」結果であった。【Q11 授業の目標や習得すべき事項の理解】と【Q12 学習意欲の高まり】の回答結果は非常に似た結果であった。授業の目標や何を学ぶべきかを理解できている学生は学習意欲が高まっているが、授業での習得すべき事項をきちんと理解できず授業を受けている学生は学習意欲が高まらないということを示していると思われる。このことは、次の設問である【意義がある授業であるか】にもつながり、授業の【理

解度】や現時点での【学習意欲の高まり】が将来の資格取得の為の学習意欲に大きく影響する可能性もあると考えられる。ただし平成 26 年度では前期よりも後期での「あてはまる」「ややあてはまる」率が高くなっている。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について学生は、80%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。特に 2011 年度と 2013 年度の後期では 4 年生の全員が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答し授業に意義があったとしている。4 年生の後期では資格試験等の模試が行われたり、また卒業が近くなったりすることから授業内容の重要性や学ぶことの意義を実感する結果になったとも考えられる。言い換えれば、1-2 年生では資格を取得したい意思はあっても、まだまだ資格試験等は遠い存在であり、実感がわからないことから大学での授業の意義や重要性を見いだせていない可能性がある。しかし 2014 年度では前後期とも 4 年生において数%の学生で「あまりあてはまらない」と回答している。学びに対する動機付けや学習意欲を上げる工夫が「学生自身にとって意義のある授業」につながり、今の学びが将来の資格取得に結びつくことを指導していく必要があると考えられる。

子ども保育福祉学科アンケート結果（図Ⅴ）

「学生自身の授業の取り組み」

「Q1. 授業を何回欠席したか。」2012年度前期の1年生だけが1～3回欠席が約9割で目立っていたが、翌2013年度前期の1年生では欠席0回が9割以上で改善された。他は3回までの欠席が8割前後に抑止されている。2014年度前期および後期も0～3回の学生が9割を占めるなど、学科としての取り組みが表れていると考える。4年生の後期は従来就職活動等の影響で4～5回欠席が2割近くに増加しているが、この傾向は2014年度も変化なし。Q2. Q3. Q4. はまとめると、「授業及びシラバス記載の事項について、どのくらいの予習・復習や準備を行ったか」聞くものである。全体的に見れば30分から1時間が2割程度。2014年度も2・3年の「ほとんどしなかった」割合が依然非常に高く6割程度。2・3年の「中弛み」に各教員とも課題や宿題、作業等で改善を試みているところだが成果が出るまでに今少しの時間が必要か。授業には出ているが、漫然と聞き流すという実態にも変化がなく、理解定着度が低いことが窺われる。「Q5. 授業中居眠り、私語、遅刻、早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。」「あてはまる」「ややあてはまる」が2014年度も約8割。基本的マナーを守って聴講する姿勢は出来ていることが分かる。しかし前述のごとく、主体的な学習こそが次の課題である。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

2014年度においては「Q6. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。」「Q7. 担当教員は、授業の目標や習得すべき事項を、毎回説明していましたか。」について、共に「あてはまる」「ややあてはまる」の合計で9割5分を達成。「Q8. 担当教員は授業の開始時刻を守っていましたか」については「あてはまる」「ややあてはまる」で9割5分以上を達成。「Q9. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」及び「Q10. 担当教員は、学生に授業への参加を促していましたか(質問等)。」に関しては「あてはまる」「ややあてはまる」がやはり9割5分をキープした。いずれも過去4年間で改善傾向或いは高評価水準を維持している。「Q12. 担当教員の講義資料は適切でしたか(教科書を含む)。」について、全体として「あてはまる」「ややあてはまる」が9割5分を維持した。唯一1年生で「あてはまる」の数値が6割程度に留まっているのが目立つが、これは大学における学問内容の高度化を意味するものと推測され、1年生に対してはより噛み砕いた懇切丁寧な指導が必要になると思われる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q13. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」及び「Q14. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。まずQ13について、2011年度を除いて2014年度まで「あてはまる」及び「ややあてはまる」が90%を維持していることから、シラバス整備や授業内容の改善に関する効果が定着したのではないかと考えられる。他方、「あまり当てはまらない」が2014年度も1年生に多く見られる点に注目が必要である。1年生については高校における学習スタイルと大学におけるその違いに戸惑っているのではないかと思料される。今後はとくに1年生に対する丁寧な学習指導（とりわけ導入教育）が望まれる。Q14についても同様で、11→12→13→14と全体的にみると「あてはまる」「ややあてはまる」が約9割5分を占め、学生の学習意欲は高い値で推移しているのが読み取れる。その反面、1年生及び4年生については「あまりあてはまらない」が他学年より多い。この理由を考えるに1年生については大学の授業や学習スタイルへの戸惑いがあるのではないかと考えられる。4年生については実習や卒論の執筆、就活等の緊張が授業評価にも反映されていると想像できる。

また授業内容に対する要求水準の高まりや健全な批判精神が育っているということも考えられる。このことから、4年生に対しては学習指導と並行して細やかなチュータリングを実施する必要があるとし、授業自体の質を高め、学生の成長や要求に答えていくことも必要であるとする。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q15. 授業は意義あるものでしたか。」について、本問は総合的な授業評価を聴く、最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられよう。2011年に比べ、2012・2013年において「あまりあてはまらない」が目に見えて減少しており、さらに「ややあてはまる」も減少したほか、はっきりと「あてはまる」と言い切る回答が増えていることが読み取れる。とりわけ2013年度及び2014年度における満足度（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）は前・後期ともに90%を大きく超えていることが分かる。これは大学全体で行われるFD活動はもとより、学部で定期的に行われるFD研修会が功を奏して各教員意識の意識が向上し、授業改善及び学科としてのフォローアップの充実が図られ、その結果として学生の満足度が全体的に向上したものと考えられる。

作業療法学科アンケート結果（図VI）

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、0 回が 70%、3 回までを含めると 95%程度と概ね良好である。特に 4 年生は臨床実習が多くをしめているため 0 回が 90%を超えている。予習復習は、前期では学年が上がるにつれて「ほとんどしなかった」が減少する傾向にあるが、後期では変化はなかった。学科では 2014 年から 1 年生に対して自主勉強会を実施しているが、学生は自主勉強会を予習復習とは捉えていないのかもしれない。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ねシラバスどおりの授業進行であると回答している。教員の授業内容説明についても同様で、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多い。私語等に対する注意も、授業に対する取り組みも、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。また、全ての項目について 4 年生が非常に高い。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解について後期ではどの学年も「あてはまる」が 20 ポイントほど高くなっている。特に 4 年生については高い意欲が見られる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

講義の意義について、「あてはまる」との回答について 4 年生が高いのは従前と同じだが、2014 年では 1～3 年生も 10～20 ポイントほど高くなっている。

言語聴覚療法学科アンケート結果(図Ⅶ)

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況について、いずれの学年も欠席が3回までが90%を越え良好である。

日々の授業に対する取り組みに関して、予習時間および復習時間共に、学年による差があり、3・4年生では後期になると1時間以上学習する学生数が4割程度に増えている。1年生では、ほとんどしないか30分未満が8～9割程度おり、しかし、シラバスに記載されている準備学習時間については、30分以上行っている学生の割合が4割程度となっている。1・2年生においては、指示された課題への取り組みはできてはいるが、自らの主体的な学びは出来ていないことが、この数値には隠されているのではないかと考える。教員として具体的な介入が必要な学生が多くいることを意識する必要がある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った授業、授業目標の説明、開始時刻、授業参加への促し、分かり易い説明指導、講義資料の適切さのいずれの項目に対して、全学年共に8割以上が、あてはまると回答し、教員の授業に対する評価は高いものであった。

学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保つに対して、ややあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまないと回答する学生が2割程度いた。このことは、学習意欲の低い学生に対する具体的指導を希望している学生がおり、適切に行う必要があることを示している。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度、学習意欲の高まりに関しては、いずれの学年共に同様な傾向が窺える。前後期共に、あてはまる、ややあてはまるを併せて9割以上であるが、あてはまるだけで見ると、前期は6割から7割程度であり、後期になると8割から9割となり、より理解の深まりや意欲の高まりが伺える。4年生に関しては、国試対策への取り組みが学習の主体となっているので、授業を別の視点で捉えている学生も若干存在するようだ。

教員としては、前期より学生個々人の理解度や学習意欲の高まりに注意を払う工夫を、さらに推し進めていく必要がある。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義については、いずれの学年も前期より、8割程度が意義あると評価しており、後期になると、3・4年生でさらに意義ある授業としての評価が高まる。

2014年度のアンケート結果から、3年生に学外臨床実習、4年生に国家試験対策があることを踏まえると、1年生より、適宜適切な個別学生への指導介入が必要であり、その取り組みへの課題が示された。

視機能療法学科アンケート結果（図Ⅷ）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の出席状況について、すべて出席した学生の割合は、2013 年度までは 68.1%であったのが、2014 年度では 72.1%と 4 ポイント改善し、出席管理システムの効果が表れてきたものと考えられる。また、日々の授業に対する取り組み姿勢については、授業中の居眠りや私語はなく学習に意欲的に取り組んだと回答した割合も 75～80%であったのが 80～95%と 5 ポイント程度改善がみられ、概ね真剣に取り組んでいることがうかがえた。しかし、予習復習等の自己学習について、「ほとんどしなかった」と回答する学生の割合が 1 年次 37.5%、2 年次 47.5%、3 年次 25.7%と、特に専門科目が増加する 2 年次で多く、対策について検討する必要がある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取り組みについて、2013 年度までは 90%以上の学生がシラバスに沿った授業展開であり、毎回の授業目標や習得すべき事項が説明されていたと回答していた。2014 年度についても同様の結果であり、各科目において、授業の一般目標や到達目標、成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施により、学生・教員ともにシラバスをもとにした授業展開が実践されていると評価できる。また、適切な講義資料の準備、質問等による授業参加の促進や学生の私語に対する注意等、授業運用及び環境設定等に関する肯定的な回答は 90%以上を維持できている。一方で、授業中のわかりやすい説明や指導に関する項目において、年々、肯定的な回答が増加しているものの、2014 年度では 1 年次 13.1%、2 年次 5.6%の学生が「わかりにくい」と感じており、改善の必要があると思われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度については、2013 年度までの結果と比較して、2014 年度においても学年ごとに理解度が高まる傾向は著変ないが、1 年次 11.1%、2 年次 7.5%の学生が「理解できなかった」と回答しており、これらの学生に対して、授業の工夫による理解度向上についても検討する必要があると思われた。また、学習意欲に関しても、学年が上がるにつれて高い傾向にあった。一方で、意欲が高まらなと回答する学生の割合は、2013 年度では、1 年次 9%、2 年次 12%、3 年次 4%であったのに対し、2014 年度では、1 年次 14%、2 年次 10%、3 年次 1%であった。特に 1、2 年次で意欲が高まらない学生の割合が減少しないことについて、対策を考える必要があると思われた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業が意義あるものであったと回答した学生の割合は、2013 年度までは、1 年次 90%、2 年次 96%、3 年次 97%であった。2014 年度は、1 年次 96%、2 年次 93%、3 年次 100%であった。学年が上がるにつれ、授業を意義あるものと回答する学生の割合が高い傾向にあった。さらなる授業満足度の向上に向けて、教員の授業運用および授業展開等に工夫の余地があり、学生自身の取り組み姿勢や意欲の向上につなげていく必要があると考えられた。

臨床工学科アンケート結果 (図IX)

「あなたの授業に対する取り組み」

授業の欠席回数は 2011 年度～2013 年度のアンケートと同様に、前期より後期の方が増加する傾向が見られた。予習復習の時間に関して、前期・後期、いずれの学年において、予習と復習の時間は同じ傾向を示した。すなわち、予習を行うものは復習も時間を費やして行うものと考えられる。30 分以上予習復習を行ったものは、2011 年度～2013 年度のアンケートより増加し、高学年になるほど予習復習に費やす時間が長くなる傾向が見られた。ただし、2 学年の後期では 30 分以上予習復習を行ったものは減少していた。シラバス内容の準備学習も予習復習と同様に高学年になるほど時間が長くなる傾向が見られた。「授業中居眠り・私語・遅刻早退なしの学習の意欲的な取り組み」については、高学年になるほど「あてはまる」が増加し意欲的に取り組んでいる傾向がうかがえるが、2 学年の後期では減少していた。

「教員の授業に対する取り組み」

「シラバスにそっての授業」、「授業目標や修得すべき事項の説明」、「授業の開始時刻」、「授業の雰囲気」、「わかりやすい説明や指導」、「講義資料の適切さ」に関しては、いずれも、前期・後期、全学年を通して、「当てはまる」が 60～80%を占める傾向が見られた。2011 年度～2013 年度では「あてはまる」が 50～70%を占める傾向が見られたことから、2014 年度は教員の授業に対する取り組みの改善が認められたと考えられる。ただし、2 学年の後期では「あてはまる」が同学年の前期と比べても、また、他の学年の後期と比べても減少した。

「授業に対するあなたの理解・達成度」

2011 年度～2013 年度のアンケートでは、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」における「あてはまる」の割合と比べて、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」における「あてはまる」の割合は減少する傾向が見られたが、2014 年度は「学生から見た教員の授業に対する取り組み」と同様に、前期・後期、全学年を通して、「あてはまる」の割合が 2011 年度～2013 年度と比べて増加の傾向を示した。ただし、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」と同様に、2 学年の後期では「あてはまる」の割合が同学年の前期と比べても、また、他の学年の後期と比べても減少した。

「総合評価：授業は意義あるものでしたか」

2011 年度～2013 年度のアンケートと同様に、「総合評価：授業に対するあなたの理解・達成度」における「あてはまる」～「あてはまらない」などの評価内容の割合は、前期・後期、全学年を通して、「授業に対するあなたの理解・達成度」と同じ傾向が見られ、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」が総合評価の「授業が意義あるものだったのか」につながると考えられる。従って、総合評価の「あてはまる」の割合が、前期・後期、全学年を通して 2011 年度～2013 年度と比べて増加の傾向を示し、授業の改善がおこなわれたものと考えられる。

薬学科アンケート結果（図X）

「学生自身の授業の取り組み」

いずれの年度・学年においても、欠席 0～3 回を合わせると 90%を超えていた。また高学年になるほど出席率が高い傾向にあった。平成 26 年度（2014 年）も、平成 23 年度（2011 年）～平成 25 年度（2013 年）と同様の傾向がみられた。

予習・復習については、1 時間以上行った学生は概ね 10%台前半、一方ほとんどしなかった学生が 30%以上で、高学年になるほどその割合が高くなる傾向が見られた。平成 26 年度は、1～4 年生において、前期に若干の低下傾向がみられたが、後期には改善していた。逆に、6 年生では、前期の予習・復習時間が、過去 3 年間よりも増加していた。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの年度・学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 80%を超えており、良好であった。平成 26 年度も同様であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った講義かどうかについての設問では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 90%を超えており、ほとんどの教員がシラバスに沿って講義を進めていることがうかがえた。平成 26 年度も同様の傾向であった。授業の開始時刻も守られているとの回答が圧倒的に多く、平成 26 年度も同様であった。授業中の静穏な雰囲気が保たれているかについても、概ね高い評価が多く、平成 26 年度も同様であった。

平成 23 年度～平成 26 年度を総括すると、全般的に、「あてはまる」、「ややあてはまる」のポジティブな評価が圧倒的に多く、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」のネガティブな評価はわずかであった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度については、平成 23 年度～平成 26 年度まで一貫してポジティブな評価が約 90%前後で、かなり多かったものの、過去 3 年間は「あてはまる」の割合がそれほど高くなかった。しかしながら、平成 26 年度は、「あてはまる」の割合が各学年で高くなっていた。学生の意欲をいっそう引き出そうとする授業の工夫などが教員側にあったと推察される。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

意義のある授業であったか否かについては、ポジティブな評価が、いずれの年度・学年においても 90%を超えていた。特に平成 26 年度は、「あてはまる」の割合が過去 3 年間に比べ高くなっていた。これは、学生自身の理解度・達成度が高くなったことによるものと思われる。

動物生命薬科学科アンケート結果（図XI）

「学生自身の授業の取り組み」

平成 26 年度の欠席回数は、平成 23 年度～平成 25 年度とほぼ同じ傾向がみられ、1 年生の授業欠席回数は他学年と比較して少なく、4 年生の欠席回数は他学年よりも多い傾向がみられた。

平成 26 年度の予習復習時間も平成 23 年～平成 25 年度と同じ傾向がみられ、一部の例外を除き、ほとんどの学年および年度・学期において、予習復習の時間は少なく、「30 分未満～ほとんどしなかった」と回答した学生は 50%以上を占めた。平成 23 年度～平成 25 年度では 4 年生後期ではその割合が高く、平成 23 年度は約 80%、平成 24 年度は約 60%、平成 25 年度は 100%であった。しかし、平成 26 年度の 4 年生後期の予習復習時間は少ないものの約 50%と他年度よりも予習復習の時間がやや多くなっていた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

平成 26 年度と平成 23 年度～平成 25 年度とは、同じ傾向であった。1 年生において、教員の授業に関する取り組みが「あてはまらない～あまりあてはまらない」と回答した学生が他の学年に比べてやや多くみられたが、上級年になるとその割合は減少する傾向がみられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

平成 26 年度と平成 23 年度～平成 25 年度とは、同じ傾向であった。いずれの学年および年度・学期においても、「授業の目標や習得すべき事項の理解」と「授業での学習意欲の高さ」とはほぼ正の相関を示していた。

1 年生において、「あてはまらない～あまりあてはまらない」と回答した学生が他の学年に比べてやや多くみられたが、学生から見た教員の授業に対する取り組みと同様に上級年になるとその割合は減少する傾向がみられた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

平成 26 年度と平成 23 年度～平成 25 年度とは、同じ傾向であった。1 年生では「あまりあてはまらない～あてはまらない」が約 10%前後みられるが、上級年ではその割合は減少傾向を示していた。